

フランスの日本研究

—歴史と現状—

森川 甫

第二次世界大戦のあいだ、アメリカ合衆国において日本研究が飛躍的に発展する以前、パリは海外における日本研究の重要な中心であった。このフランスにおけるこの日本研究がどのような歴史をたどり、現状に至っているかを概観したいと思う¹⁾。

フランスにおける日本研究は、ベルナール・ランク教授がコレージュ・ド・フランス日本文明講座開講講演において指摘された如く、遠く16世紀中葉にさか上る。すなわち、コレージュ・ド・フランスの源である王立教授団の一員であったギョーム・ポステルは、『世界の驚異。就中印度ならびに新世界にて嘆称すべきことども』²⁾と題する著作をなし、その中で日本に関してきわめて興味深い見解を披瀝している。「世界にはこれらの地だけでなく[・・・]、驚くべき巨大な島々もあり[・・・]、しかし、その中で最も感嘆すべきは、かってジパンジ、または、ジパングリ（これらはマルコ・ポーロの用いた古い用語である）と呼び慣わされたジアパンの国であって、私はとりわけ、この国について書く積りである。なぜならば、この国は今日まで知られることなく、東方の最端に位置し、世界で最も感嘆すべきことを保持しているからである。」³⁾と述べて日本人

の宗教生活や人間関係の規範についてさまざまな興味ある考察を行なっている。17世紀には、モレリが『大辞典』⁴⁾の中で日本の位置、気候、風土、風習、統治、宗教、キリスト教の宣教などについて述べており、ピエール・ペールも『歴史批評辞典』⁵⁾の中で日本の宗教について言及している。

しかし、この小論では日本語が学校で公式に教えた時、つまり、東洋語学校において日本語の教授が始められた1863年（公式には1868年）以後、今日までを次の如く区分して、フランスにおける日本研究を概観したい。

- 1) 第一次大戦以前。
- 2) 第一次大戦から第二次大戦まで。
- 3) 第二次大戦から1968年まで。
- 4) 1968年以後。

1) 第一次大戦以前。

まず、レオン・ド・ロニ⁶⁾を挙げることができる。1862年、徳川幕府派遣第一回使節団の通訳をつとめ、同使節団の福沢諭吉と親交をもった。また、1873年、パリで第一回東洋学国際学会を開催した。文学に関する主要著書としては、『日本名詩選集、日本列島の古今の詩』⁷⁾がある。ロニは

- (1) この問題に関するすぐれた業績に、Bernard FRANK, *Cinquante ans d'Orientalisme en France(1922-1972), Les Etudes japonaises.* (*Journal Asiatique*, 1973), Librairie Orientaliste, Paul Geuthner [以下略号BF.を用いる]がある。この小論も1922年-1972年に関しては、BF.に多く負うている。
- (2) *Des Merveilles du monde, et principalement des admirables choses des Indes et du Nouveau monde*, Bibliothèque Nationale (以下、略号BN.を用いる。)
- (3) Guillaume POSTEL, *ibid.*, Chap. VI, cf.「宗教と文学の鏡を通してフランスから見た日本—コレージュ・ド・フランス日本文明講座開講講演一」ベルナール・ランク、石井晴一（訳）（「文学」岩波、第49巻第1号、1981年）。
- (4) MORERI, *Le Grand Dictionnaire historique, ou le Mélange curieux de l'histoire sainte et profane.* 1674. BN.[Rés. G 330.]
- (5) Pierre BAYLE, *Dictionnaire historique et critique*, Rotterdam, 1697.
- (6) Léon de ROSNY (1837-1914).
- (7) *Anthologie japonaise, Poésies anciennes et modernes des insulaires du Nihon...*, Paris, 1871.

1863年から東洋語学校で日本語を教え始め、1868年、日本語の初代正教授に就任した。1863年に同校の日本語講座開講講演を行なっているが、幕末当時の日本の国際的、国内的状況を適確に捉え、日本および日本人のその後の発展を見事に見透し、日本語を学ぶ重大な意義を強調している。ロニは東洋語学校で新たに日本語講座を開くに至った状況と、それが諸科学、文学、産業、また、政治や通商の関係を発展させる利益を述べたのち、次のように結んでいる。「今、私は講演を終えねばならない時がきた。しかし、私もまた、フランシスコ・サビエルがイグナチウス・ド・ロヨラに言ったのと同じ言葉を言わなければならない。『私は日本人について語り出すと、やめることができない。彼らは真に私の心の喜びである』と。諸君のなかで彼らの言語を学び、彼らと良き知的関係を保っているならば、彼らを理解できず、また、彼らから理解もされない者たちの不当な判断を否定し、そして、『日本人は生来の善意と誠実さによって、また、精神の卓越さによって我々ヨーロッパの多くの国民よりも優れている。』とフロエス神父と共にきっと繰り返すであろう。そして、最後に、この島に住む人々は、他のアジアの国民のなかでは長い間眠っているように見える知的長所を保持している。『平和な2世紀の年月が日本文明をヨーロッパ以外の古い世界のすべての文明よりも優れたものにした』とオランダの大旅行家シーボルトが言った。今日、東洋の諸国民のなかで日本の国民のみが精力と活力に満ち、未来に向って自己自身の意志で高速度で前進している。日本人のみが外国の圧力を受けずに、我々の間で実現された偉大な進歩を身につけることを求めている。日本人のみが、厭うことなく、休むことなく、ヨーロッパと同列に並ぼうと努めている。人口過剰、世界の他の国々に対して長年とってきた鎖国政策、強力な封建的

貴族階級の古い利益と、西洋との通商開始以来國の内部に生れた新しい利益を妥協させるときのいざこざ、上流階級に搾取され、そして、すでに知識階級に現われている開放運動に対立する国民大衆の宗教的偏見、このような社会活動の多岐にわたるあらゆる要素が激しく流動する土壤の上に日本国民を置いている。しかしながら、今、展開しているこの時代が最も豊かな成果をもたらすに至ることは疑うことができない。ヨーロッパの諸国の現状を賞賛すべき精巧さと比類ない鋭敏さで研究した『大君の使節』は、恐らく日本の近い将来の変貌に重大な役割を果すことになるであろう。この使節団の一員が二度目のフランスを去る前に私に言った。『私の祖国にいかに自由が欠けているかを思うとき、私は今や眠ることができない。』と。自らの国と運命を共にすることを求められている人々の間では、変革時には絶えず自らを強めるあの知的状態に彼は至っていたのだ。彼はより適切な時期に熱烈な信念をもつのみならず、パリと同様、江戸でも、人々を偉大な市民に変える高貴な情熱の豊かな萌芽を彼の心に根づかせていた。諸君、これが日本の現状である。このように優れた性質をもつ国民に対して、ヨーロッパが得る政治的、また、通商的利益は日に日に急速に増加しうるのみである。それ故、日本語の研究は様々な理由で時宜を得ており、また、疑いもなく将来性がある。それが諸君にとって、できる限り容易に、そして、喜ばしいものであるように、私が全力をあげて努めることを信じて貰いたい。⁸⁾

19世紀後半から20世紀初めにかけては、レオン・ド・ロニのほか、次のような日本研究家が活躍している。ド・ロニと東洋語学校教授職を競ったレオン・パジェスは『日葡辞典』⁹⁾を仏訳し、きわめて有用な『日仏辞典』¹⁰⁾を刊行した。

アンリ・コルディエは極東、特に、中国に関し、¹¹⁾

(8) *Discours prononcé à l'ouverture du cours de japonais à l'Ecole... des langues orientales*, Paris, Maison-neuve, 1863.

(9) Léon Pagès (1814-1886).

(10) *Dictionnaire japonais-portugais*, 1603.

(11) *Dictionnaire japonais-français*, 1868.

(12) Henri CORDIER (1849-1925).

多くの著作、論文を書いた歴史学者であり、著書に『日本文献目録。1870年以前の日本帝国に関する著作の文献辞典』¹³⁾がある。

ジョルジュ・アペールは1880年、東京法学校で、ついで、1885年から1889年には東京帝大でフランス法を講義し、また、『御成敗式目』を分析研究した。共著に『古代日本』¹⁶⁾がある。

ド・ミッシェル・ルヴォンは法学者で、アペールの後継者である。法学以外の分野で日本に関心をもち、北斎や生花を研究した。著書に『日本文学詞華選、その起源から20世紀まで』¹⁸⁾がある。

ノエル・ペリは日本伝道のため1889年来日したが、仏教と日本文明を知る必要を感じ、研究生活に転向した。業績としては、能の翻訳と論文があり、また、『日本語音階論』²¹⁾を書いている。

クロード・メートルは哲学の高等教員資格者で、法隆寺研究を行なった。また、「日本の歴史文学。その起源から足利時代まで」²³⁾を書いた。

ドートルメールは「猿かに合戦」「舌切り雀」「花咲じじい」「桃太郎」など、おとぎ話の翻訳が

ある。²⁴⁾

2) 第一次大戦から第二次大戦まで。

この時期における最も重要な出来事は、1924年に東京日仏会館が設立されたことであろう。フランス政府は東京日仏会館の設立のため、1919年リヨン大学長のジュバン、²⁶⁾リヨン大学教授のモーリス・クーランを政府使節団として日本に派遣した。また、当時の駐日フランス大使、ポール・クローデルは日本政府との交渉に当り、ついに創設に至った。会館の運営のため、アフガニスタンからアルフレッド・フーシエが送られ、また、以前から日本の仏教学者と学問的交流のあったインド学者のシルヴァン・レヴィ²⁹⁾が呼ばれ、初代館長に就任した。また、ポール・ドゥミエヴィル³⁰⁾が中国より来日し、レヴィ館長に協力した。1927年、レヴィ館長は「日仏会館紀要」を創刊し、以後、多くの日本研究に関する論文が発表されることになる。

東京日仏会館の設立は、フランスの日本研究のため、二つの点できわめて重要な手段となったと思わ

- (13) *Bibliotheca japonica. Dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs à l'Empire japonais rangés par ordre chronologique jusqu'à 1870*, Paris, E.Leroux, 1920.
- (14) Georges APPERT.
- (15) Cf. BF. p.257.
- (16) *Ancien Japon*, Tokyo, 1888.
- (17) De Michel REVON (1867-1943).
- (18) *Anthologie de la littérature japonaise des origines au XX^e siècle*, 1910.
- (19) Noël PERI (1865-1925).
- (20) *Cinq NO, drames lyriques japonais*, Paris, 1921.
- (21) *Essai sur les gammes japonaises*, 1934. cf. BF. p.258.
- (22) Claude MAITRE (1876-1925).
- (23) *La littérature historique du Japon, des origines aux Ashikaga*, 1903 et 1904, cf. BF. p.259.
- (24) J.DAUTREMER, *Contes du vieux JAPON*. Tokyo.
- (25) Maison franco-japonaise de Tokyo.
- (26) JOUBIN.
- (27) Maurice COURANT (1865-1935). 中国、朝鮮に関して多数の著書・論文がある。日本に関しては、*De la Lecture japonaise des textes contenant uniquement ou principalement des caractères idéographiques*, Paris, 1897. がある。
- (28) Alfred FOUCHER, «Etudes sur l'art bouddhique de l'Inde», *Bulletin de la Maison Franco-Japonaise* (以下、略号、BMFJ.)
- (29) Sylvain LEVI (1863-1935), フランスの印度学者。コレージュ・ド・フランス教授。著書に、*Théâtre indien*(1890), *Buddhacarita*(1892), *la Doctrine du sacrifice dans les Brāhmaṇas* (1898), *le Népal* (1905-1908), *l'Inde et le monde* (1926) などがある。
- (30) Paul DEMIEVILLE, *Hōbōgirin, Dictionnaire encyclopédique du bouddhisme...*, Tokyo, 1929-1931.
- (31) Cf. (28)

れる。第一は、フランス人の日本研究者が長期滞在をして研究に専念できる機関が備えられたことであり、第二は「日仏会館紀要」刊行という出版活動により、研究活動の成果を発表し、研究を促進したことである。

東京日仏会館の最初の研究員はシャルル・アグノーエル³²⁾である。³³⁾セルジュ・エリセエフと共に、天才的日本学者とも言えるアグノーエルはフランスにおける日本研究の質的レベルを向上させ、また、多数の日本学研究者を養成した。彼はマルセル・グラネ³⁴⁾アンリ・マスペロ³⁵⁾、ポール・ペリオ³⁶⁾、シルヴァン・レヴィ³⁷⁾、メイエ³⁸⁾、マルセル・モースらから考古学、文献学、民族学、言語学的方法を修得したのち、8年間(1924~1932)にわたって、日本帝国全土(朝鮮、樺太、琉球、台湾を含む)、中国、満州を廻り、厖大な知識を獲得し、それを多くの出版物として発表した。³⁹⁾

1926年に研究員となったポール・ドミエヴィ

ルは仏教辞典『法寶義林』出版の事業に協力するため中国より着任した。

1930年には後にコレージュ・ド・フランスの「インドシナの歴史と文献学講座」担当教授となるエミール・ガスパルドンヌ⁴⁰⁾が研究員として来日し、『法寶義林』の事業に協力した。『日本学文献目録』を著し、「学術的文献目録の出版は日本研究において緊急の課題の一つである」と述べて、定期刊行物、書誌、歴史学、地理学、経済学、法学、人類学、言語学、文学などの領域別に文献目録を作成した。

ジョルジュ・ボノー⁴¹⁾は1932年から1939年まで研究員であった。数多くの著書の中には、どどいつ、短歌、俳句、新体詩を翻訳し、フランスに紹介している『日本の韻律』や『日本詩歌選集』、子供や農民、宗教や芸術における日本人の感性を表わす作品を翻訳している『日本の感性』⁴²⁾がある。また、『古今集の序文』の翻訳、さらに、正岡子規、石川啄木、与謝野晶子、島崎藤村、佐藤春夫、堀口大学、

(32) Charles HAGUENAUER.

(33) Serge ELISSÉEFF.

(34) Marcel GRANET. (1884~1940) フランスの中国学者。高等研究院中国研究所の創立者。中国に関する民俗学資料の分析に社会学的方法を用いた。著書に *Fêtes et Chansons anciennes de la Chine* (1919), *La Civilisation chinoise* (1929), *la Pensée chinoise* (1934) などがある。

(35) Henri MASPERO (1883~1945), フランスの中国学者、コレージュ・ド・フランス教授。南東アジア、仏教、道教、中国史に関して多数の著作がある。 *La Chine antique*, Paris, 1927.

(36) Paul PELLIOT (1878~1945), フランスの中国学者。極東フランス学院(ハノイ)教授。中央アジアを考古学的に探検し、6世紀から9世紀の中国およびチベットの写本を多数発見した。著書に、*les Grottes Touen-houang* (1920~1924), *Jades archaïques de la Chine* (1925), *la Mission Pelliot en Asie centrale* (1924), *les Mongols et la papauté* (1922~1923) がある。

(37) Antoine MEILLET (1866~1936), フランスの言語学者。高等研究院教授。多数の印欧語を研究した。著書に *Le Slave commun*, 1914; *Esquisse d'une histoire comparée de l'arménien classique*, 1903; *Alt-armenisches Elementardurch*, 1913; *Grammaire du vieux-perse*, 1915; *Traité de grammaire comparée des langues classiques*, 1924; *Caractères généraux des langues germaniques*; *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 1903. など多数ある。

(38) Marcel MAUSS (1873~1950), フランスの社会学、民俗学者。主著に *Essai sur le don, forme archaïque de l'échange* (1932~1934) がある。

(39) BMFJ, *Journal Asiatique* (略号 JA.), *T'oung Pao* (略号 TP.) に寄稿している。((L'adresse du Dignitaire de la Province d'Izumo))(BMFJ, I, 4, 1929), ((Mélanges critiques))(id. II, 3~4, 1930), ((Notions d'archéologie japonaise))(id. III, 1~2, 1931), ((La danse rituelle dans le Chinkonsai))(JA. 1930), ((Lieux d'asile au Japon et en Corée))(id. 1934), ((Du caractère de la représentation de la mort dans le Japon antique))(TP. XXXIII, 2, 1937) など。

(40) Emile GASPARDONE.

(41) ((Les bibliographie japonaise)) (BMFJ., IV, 1~4, 1933), p.29.

(42) Georges BONNEAU.

(43) *Rythmes japonais.*, Kôbe, Paris, Paul Geuthner, 1933.

(44) *Anthologie de la poésie japonaise*, Paris, Paul Geuthner, 1935.

(45) *La sensibilité japonaise*, Paris, Paul Geuthner, 1935.

西条八十など近代文芸の歌人や詩人の作品を翻訳、紹介している。『現代日本文学文献目録』⁽⁴⁶⁾や『現代日本文学史、1868~1938年』⁽⁴⁷⁾の著作もあり、安部公房の『砂の女』⁽⁴⁸⁾の翻訳もある。

ガストン・ルノンドーは、1909年から1913年砲兵将校として滞日し、1902年には『陸軍用語日仏辞典』⁽⁵⁰⁾を刊行した。1924年から1928年にかけて再度滞日し、能に関する研究と翻訳を行なった。『能における仏教』⁽⁵¹⁾『能一翻訳選集』⁽⁵²⁾などの著書がある。

欧米における日本研究の第一人者と呼ばれるにふさわしいセルジュ・エリセエフは1889年ペテルスブルグに生れ、1908年来日し、東京帝大に入学、日本文学を研究した。1914年ロシアに帰国し、ロシヤ革命を体験したのち、1921年パリに亡命した。以後、彼の目覚しい日本研究の活動が行なわれ、欧米における日本研究の発展のため、極めて重要な役割を果した。1923年、クロード・メートルが創刊した「日本と極東」誌の刊行に協力した。この雑誌は1年で廃刊になったが、エリセエフは志賀直哉、谷崎潤一郎、永井荷風、芥川竜之介、久保田万太郎、長谷川如是閑、菊地寛、里見弔らの作品を翻訳、紹介した。⁽⁵³⁾ 1925年には、「アジア芸術誌」⁽⁵⁴⁾が創刊されたが、エリセエフは日本および中国の芸術に関する

⁽⁵⁵⁾ る論文、翻訳、書評を寄稿した。『日本現代絵画』⁽⁵⁶⁾を著し、また、『原始時代から現代までの芸術世界史』⁽⁵⁷⁾を編纂した。⁽⁵⁸⁾ 1928年からルーヴル学院で日本藝術について講義したが、高等研究院宗教部門では、『日本宗教史』講座が創設され、エリセエフが迎えられた。彼はここで仏教肖像の研究をした。この年の終り、ハーバード大学の燕京研究所に招かれ、1957年定年退職するまで、在任した。そしてこの間、ライシャワー博士はじめ多数の日本研究者を養成した。

前述のシャルル・アグノーエルは1932年帰国し、東洋語学校、および、高等研究院で講義を担当した。高等研究院では、1932年から1940年、1945年から1967年の間に『古事記』、『祝詞』、『宣命』、『今昔物語』をテキストとして使用して講義した。

1934年、三井合名会社がパリ大学に日本研究所⁽⁶⁰⁾を寄付した。この研究所はパリ大学国際都市の日本館を所在地とした。また、1959年には日本高等研究所⁽⁶¹⁾が設立された。

1937年、ミッシェル・ルボンはソルボンヌの文学部を退官したが、彼は在任中、ソルボンヌで二つの博士論文を指導した。ジルベルト・ラ・ドルジュの「18世紀の歌人、加賀の千代女」⁽⁶²⁾および、アンドレ・ボージャールの「清少納言、その時代と作

(46) ((Bibliographie de la littérature japonaise contemporaine)), *BMFJ*, IX. 1938.

(47) *Histoire de la littérature japonaise contemporaine* (1868~1938), Paris, Payot, 1940.

(48) *La femme des sables*, Stock, 1967.

(49) Gaston Renondeau (1879~1967).

(50) *Dictionnaire japonais-français des termes militaires*, 1912, cf. *BF*. p.264.

(51) *Le Bouddhisme dans les nô*, Maison Franco-Japonaise (略号, *MFJ*.), 1950.

(52) *Nô*, *MFJ*., 1953 et 1954.

(53) *Japon et l'Extrême-Orient*.

(54) *Neuf nouvelles japonaises contemporaines*, Van Oest, 1924.

(55) *Revue des Arts Asiatiques*.

(56) *La peinture contemporaine au Japon*, Paris, 1923.

(57) *Histoire universelle des arts des temps primitifs jusqu'à nos jours*, Paris, A. Collin, 1939.

(58) Ecole du Louvre.

(59) La Section des Sciences religieuses de l'École Pratique des Hautes Études.

(60) Institut des Etudes Japonaises.

(61) Institut des Hautes Études Japonaises.

(62) Michel REVON, cf. *BF*., p.269.

(63) Mme Gilberte HLA-DORGE, *Une poétesse japonaise au XVIII^e siècle; Kaga no Tchiyo-jo*, Paris, Maison-neuve, 1936.

品『枕草子』⁶⁴⁾の審査を行なった。

アンドレ・ボージャールは獣医であったが、日本語、日本文学に深い関心をもち、研究生活に入り、『狂言研究諸論』⁶⁵⁾を著している。

ショルジュ・ポンマルシャンは駐日フランス大使館通訳をつとめたのち、領事となったが、西鶴の『好色一代女』⁶⁶⁾や『好色五人女』⁶⁷⁾などの翻訳がある。

3) 第二次大戦後から1967年まで。

大戦中、米国の日本研究は一大発展を遂げたがフランスでは不振であった。東洋語学校で教えていたアグノーエルはドイツ軍の占領下にあったパリを去り、代ってジャン・ビュオが日本語を担当する。ビュオは来日の経験はないが、「仏陀の多様性」⁷⁰⁾「仏教藝術に関する覚書」⁷¹⁾などの論文がある。

シャルル・アグノーエルは1945年、パリに帰り、東洋語学校および高等研究院（宗教部門）に戻る。1947年には文学博士論文を提出し、学位が授与される。主論文は「日本文明の起源。日本の先史時代研究の序論」、副論文は「日本研究要約」⁷²⁾である。また、パリ大学文学部の講師、ついで教授に就任した。彼は、その後、歴史学、言語学に関する多数の論文、著作を発表している。1959年には、アグノーエルの努力により、パリ大学に前述の如く日本高等研究所が設置され、日本館に保管されてい

た日本研究所の蔵書を引き継いだ。この日本高等研究所は1973年に、パリ大学の解体によりコレージュ・ド・フランスに移管された。

セルジュ・エリセエフは1957年、ハーバード大学を定年退職し、米国から帰仏し、高等研究院（第六部門）に創設された「近代日本史」講座の教授に就任した。1962年からはポール・赤松がエリセエフの代講をし、エリセエフの退官後、引き続いて講義している。ポール・赤松には『明治。1868年』⁷³⁾の著作がある。

戦時中および戦後、東京日仏会館はどのように活動していたであろうか。ジュオン・デ・ロングレが1939年から1946年にかけて館長をつとめ、日仏会館を守った。彼は法制史の専門家で、また、古文書学者でもあった。帰国後、パリ国立古文書学院で日本古文書学および法制史を講義した。彼は大著、『二代の妃』⁷⁴⁾を著している。

建築家のプロラン・ギランもまた、戦時中、日本に留まり、『日本の城』⁷⁵⁾を著している。

ルノンドーは日蓮宗を研究し、『日蓮の教理』⁷⁶⁾を書いているほか、仏教に関する翻訳、論文が多数ある。この他、出版社からの要請で太宰治の『斜陽』、『人間失格』、谷崎の『細雪』、『ふうてん老人』、三島の『宴のあと』、『潮騒』など現代文学を翻訳、紹介した。

- (64) André BEAUJARD, (1893-) *Sei Shōnagon, son temps et son œuvre et Les Notes de Chevet de Sei Shōnagon*, Paris, Maisonneuve, 1934.
- (65) *Le théâtre comique des Japonais, introduction à l'étude de kyōgen*, Paris, 1939.
- (66) Georges BONMARCHAND (1884-1967).
- (67) *Kōshoku Ichidai-onna* (Vie d'une amie de la volupté).
- (68) *Kōshoku Gonin-onna* (Cinq amoureuses). Collection UNESCO, Connaissance de l'Orient, 1959.
- (69) Jean BUHOT (1885-1952).
- (70) ((La pluralité des Bouddhas...)), *Bulletin des amis de l'Orient*, 1923.
- (71) ((Notes d'architecture bouddhique)), *Revue des Arts Asiatiques*, 1937, 1939-42.
- (72) *Origines de la civilisation japonaise, Introduction à l'étude de la préhistoire du Japon*, 1956.
- (73) Compendium des études japonaises.
- (74) Paul AKAMATSU (1927-), *Meiji, 1868*. 1968.
- (76) Frédéric JOÜON DES LONGRAIS (1892-), *Tashi—Le Roman de Celle qui épousa deux empereurs*, Vol.1, 1965, Vol.2, 1969. MFJ.
- (77) Florent Guillain, *Châteaux-forts japonais*, BMFJ., 1942.
- (78) Gaston RENONDEAU, *La Doctrine de Nichiren*, Paris, PUF., 1953.
- (79) Cf. BF. p.281.

戦後、来日した最初の東洋学者はルネ・グルー⁸⁰⁾セであった。ギメ、およびセルニュキ美術館の主任管理者であり、ルーヴル学院、および東洋語学校の教授でもあった。アジアに関して厖大な著書、論文がある。グルー⁸¹⁾セが「正倉院はシルク・ロードの終着点である」と指摘したのは有名である。彼の協力者には、セルジュ・エリセエフの息子、ヴァジム・エリセエフ⁸²⁾とユゲット・ルーセ⁸³⁾がいる。ヴァジム・エリセエフには、『文字以前の人間』⁸⁴⁾や、ダニエル・エリセエフとの共著、『日本文明』⁸⁵⁾の著作がある。特に、後者は写真、地図などを多く用いて、日本文明の諸相を紹介した高度な概説書である。ルーセには、『熊本地方先史時代の墓』⁸⁶⁾と題する論文がある。⁸⁷⁾マドレーヌ・ポール・ダビドは1951年から1953年にかけて日仏会館の研究員として滞日した。ラルース社刊の『芸術と人間』⁸⁸⁾のなかで「日本藝術」の項も執筆している。

戦時中、クレルモン・フェラン、ついで戦後、高等研究院でアグノーエルの弟子として学んだルネ・シフェール⁸⁹⁾は1951年から1954年にかけて日仏会館の研究員であった。多彩な翻訳活動をおこなっており、『竹取物語』⁹⁰⁾、『狂言』⁹¹⁾、『雨月物語』⁹²⁾、『眠れる美女』⁹³⁾などの翻訳がある。1954年

に帰仏したアグノーエルがパリ大学教授に就任したので、シフェールはアグノーエルの東洋語学校の地位を引き継ぎ、1970年にはパリ第3大学に併合された元東洋語学校の校長に就任し、今日に至っている。

⁹⁴⁾ベルナール・フランクもまた、アグノーエルの弟子であるが、1954年から1957年にかけて日仏会館研究員として在日し、1965年には高等研究院（第四部門、歴史学、文献学）の教授に就任し、1970年、文学博士の学位を授与されている。1972年から1974年にかけて日仏会館館長として滞日し、1974年にはコレージュ・ド・フランス付属日本研究所所長となり、1979年にはコレージュ・ド・フランスの教授に就任した。平安時代における方角禁忌の研究、きわめて優れた翻訳、深沢七郎の『楳山節考』⁹⁵⁾、また、『今昔物語』⁹⁶⁾の仏訳⁹⁷⁾と詳細な注がある。

⁹⁸⁾中国学者のミッセル・ソワミエは1956年から1959年にかけて、日仏会館の研究員であった。現在、高等研究院第四部門で中世および近代の中国の歴史及び文献学を担当している。

地理学の高等教員資格者、ジャック・プズー・マサビュオ⁹⁹⁾は1960年から1963年にかけて日仏

(80) René GROUSSET (1855–1952).

(81) Cf. *BF*. pp.281–282.

(82) Vadime ELISSÉEFF, (1918–).

(83) Mlle Huguette ROUSSET.

(84) *L'homme avant l'écriture*, A. Colin, 1959.

(85) *La Civilisation Japonaise*, Paris, Arthaud, 1974.

(86) ((Les tombes préhistoriques de la région de Kumamoto)) *Arts Asiatiques*, t. IX, 1–2, 1962–63, cf. *BF*. p.283.

(87) Mlle Madeleine PAUL-DAVID.

(88) *L'Art et l'Homme*, Larousse, 1958–61.

(89) René SIEFFERT (1923–).

(90) ((Etudes d'ethnographie japonaise.—Le Conte coupeur de bambous (traduction))) *BMFJ*, T. II, 1952.

(91) ((Bibliographie du théâtre japonais.—Mibu-kyōgen.)) *BMFJ*, T. III, 1953.

(92) *Contes de pluie et de lune*, Connaissance de l'Orient, 1956. cf. *BF*. p.284.

(93) *Les belles endormies*, Albin-Michel, 1970. cf., *BF*. p.284.

(94) Bernard FRANK (1927–).

(95) ((Kata-imi et Kata-tagae, étude sur les interdits de direction à l'époque Heian)) *BMFJ*, T. V, 2–4, 1958.

(96) *Narayamabushi kō* ((Étude à propos des chansons de Narayama)) Gallimard, 1959.

(97) *Histoires qui sont maintenant du passé*, Connaissance de l'Orient, 1968.

(98) Michel SOYMIE (1924–).

(99) Jacques PEZEU-MASSABUAU (1930–).

会館の研究員であった。『日本の家と雪』¹⁰⁰⁾『日本地理』¹⁰¹⁾などの著作がある。

歴史学と地理学の高等教員資格者の、フランシス・エライユは1961年から1964年にかけて日仏会館の研究員であった。パリ第3大学（元東洋語学校）の日本史担当の教授である。『十一世紀初頭の日本の官職と官僚』¹⁰²⁾、『四度使』¹⁰³⁾などの著作、『御堂関白記』¹⁰⁴⁾の著作がある。

ミッシェル・ヴィエは1963年から1967年にかけて日仏会館の研究員であった。明治史、特に藩閥の研究に業績をあげ、現在、パリ第三大学教授である。著者に『日本の歴史。その起源から明治まで』¹⁰⁵⁾や『現代日本』¹⁰⁶⁾がある。

4) 1968年以後。

1968年5月にいわゆる「メ・ソワント・ユイット」（五月事件、または五月革命）が起り、フランス政府は1969年から1970年にかけて高等教育の改革を実施し、特に、大学を根本的に改革した。

1967年にアグノーエル教授が退官する。高等研究院第四部門（文献学、歴史学）ではフランク教授が前述の如く1965年にアグノーエル教授の後

を継いでいるが、第五部門（宗教学）ではハルムート・オ・ローテルムント¹⁰⁷⁾がアグノーエルの後継者となる。

ローテルムントはハンブルグ大学で山伏の研究により文学博士の学位を得ており、「古代日本の信仰」¹⁰⁸⁾「鎌倉時代の日本人の神観念」¹⁰⁹⁾などの研究がある。

パリ大学文学部でのアグノーエルの後継者はユベール・マエス¹¹⁰⁾であった。マエスは1970年パリ第7大学教授に就任した。高等師範学校卒業生、高等教員資格者という秀才で、早大の交換留学生として滞日したほか、しばしば来日していた。研究は二つの領域にわたっているが、一つは徳川時代の社会史と文学史、「江戸時代の日本文学における仮空の旅行」¹¹¹⁾、「徳川時代における見世物」¹¹²⁾などの論文や平賀源内¹¹³⁾の『風流志道軒伝』¹¹⁴⁾の翻訳がある。第二は言語学で、江戸時代の文法学者の労作に基き、日本語文法の伝統を研究し、1970年、文学博士の学位を得た。

マエスの後継者はジャックリヌ・ピジョー¹¹⁵⁾である。ピジョーも高等師範学校卒業生で、1967年から1970年にかけて日仏会館研究員として在日している。「お伽草子における道行文」¹¹⁶⁾、「中世物語の一典型について」¹¹⁷⁾、「お伽草子作家の技巧について」¹¹⁸⁾、「谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』—講座比較文

(100) ((La maison japonaise et la neige)), *BMFJ.*, T. VIII, 1. 1966.

(101) *Géographie du Japon*, PUF., 1968.

(102) Mlle Francine HERAIL.

(103) Fonctions et fonctionnaires japonais au début du XIe siècle, cf. *BF*. p.287.

(104) ((Yodo no tsukai ou le système des quatre envoyés)), *BMFJ.*, T. VIII, 2, 1966.

(105) *Mido Kampakuki*.

(106) Michel VIE (1929-). 1982年、関西日仏学館館長に就任。在任中。

(107) *Histoire du Japon des origines à Meiji*, PUF., 1969.

(108) *Le Japon contemporain*, PUF, 1971.

(109) Harmut O. Rotermund (1939-).

(110) ((Les croyances du Japon antique, Encyclopédie de la Pléiade)), *Histoire des Religions*, 1970.

(111) ((La conception des kami japonais à l'époque de Kamakura)), *Revue de l'histoire des religions*, juillet, 1972.

(112) Hubert MAES (1938-1976).

(113) Les voyages fictifs dans la littérature japonaise de l'époque d'Edo (*France-Asie* no.182, janv.-mars 1964).

(114) Attractions foraines sous les Tokugawa, (*id.* no.184, hiver 1965-66).

(115) *Histoire Galante de Shidôken*, Paris, L'Asiathèque, 1979. この著書には、風来山人（源内）の『風流志道軒伝』の翻訳の他、註113、114. の二つの論文を収めている。

(116) Mlle Jacqueline PIGEOT.

(117) 「文学」岩波書店、1975年6月。

(118) 「文学」、1976年9月。

(119) 「国語国文学」、1980年。

学2¹²⁰⁾、『横笛草子』¹²¹⁾などの多くの業績の他、日本人論についての専門家でもある。

輝かしい伝統をもつ東洋語学校は1969年、高等教育改革により、「東洋語大学センター」¹²²⁾となり、ついで、パリ第3大学に併合され、「東洋言語・文明教育研究センター」¹²³⁾(INLCO)となる。前述の如く、シフェールはこの「教育研究センター」の校長に就任し、高等師範学校卒業生で、高等教員資格者のジャン・ジャック・オリガスが1965年に講師、1968年に教授に就任している。オリガスは漱石の小説創作に関する研究家で、「小説作品における夢ーフローベール、プルースト、夏目漱石」¹²⁵⁾、「森鷗外の文体について」¹²⁶⁾などの業績がある。

また、パリ第6大学ではモーリス・コワイヨーが数量言語学科で講義している。コワイヨーは1972年から1973年にかけて日仏会館研究員であった。

以上のほか、ジャック・ミュテルには、『幕府から明治時代の日本』¹²⁹⁾の著書があり、CNRS(国立中央科学研究所)研究員のピエール・フォールには「永井荷風の『隅田川』に関する研究」¹³¹⁾があり、I

N L C Oの講師で芸術史を専攻するフランソワ・ペルチエ¹³²⁾は日本の彫刻を研究し、学位論文を提出した。

フランスの日本研究は当初より、文学、言語、宗教、芸術など人文科学の領域にとどまっていたが、戦後は社会科学の分野にも研究者が現われている。パリ大学元教授、フランス社会学会の指導者の一人でもあったジャン・ステッツェル¹³³⁾は戦後の日本の青少年の態度を調査研究して、1955年に『菊も刀もなく』¹³⁴⁾を著しており、また、1963年には「社会科学、人文科学の世界的貸借対照表は可能か」¹³⁵⁾を書き、今後の国際社会における日本人の果すべき役割について重要な示唆を与えている。

また、経済統計学者のクリスチャン・ソテール¹³⁶⁾は1973年に『ジャポン、その経済力は本物か』¹³⁷⁾を著し、日本経済の本格的分析を行なっている。また、ソテールは1979年に社会科学高等研究院現代日本研究所の初代所長に就任した。

オーギュスタン・ベルク¹³⁸⁾は1981年、ソテールのあとを継いで、第二代所長となった。ベルクは東京のアテネ・フランセで教え、また、北大、東北大で客員教授を勤めたこともある。著書には『日本。国

(120) 東大出版会。

(121) ((*Histoire de Yokobue*)), BMFJ., T. IX. 2, 1972.

(122) Centre Universitaire des Langues Orientales Vivantes.

(123) Institut National des Langues et Civilisations Orientales.

(124) Jean-Jacques Origas (1937-).

(125) ((*Le rêve dans le récit romanesque—Flaubert, Proust, Natsume Sôseki*)).

(126) ((*Sur le style de Mori Ôgai*)) 1964, cf. BF, p.292.

(127) Maurice COYAUD (1934-)。業績として、((*Etudes sur le lexique japonais de l'histoire naturelle et de la biologie*)), BMFJ., T. X, 1, 1977. がある。

(128) Jacques MUTEL (1929-).

(129) *Le Japon, du shôgunat à l'époque de Meiji*, Hatier, 1970.

(130) Pierre FAURE (1934-).

(131) ((*Étude sur la Sumida-gawa de Nagai Kafû*))「名古屋大学文学部紀要」1971-72.

(132) François BERTHIER (1937-).

(133) Jean STOETZEL (1910-), 元パリ大学教授、CNRS 社会学研究所名誉所長、また、フランス世論研究所所長、ユネスコ代表団社会科学委員会委員長などを歴任。

(134) *Without the chrysanthemum and the sword*, UNESCO, 1955.

(135) ((*Un Bilan Mondial des Sciences Sociales et Humaines est-il possible?*)), 「関西学院大学社会学部紀要」No. 39, 昭和54年12月20日。

(136) Christian SAUTER, 1981年、フランス政府顧問に就任し、在任中。

(137) *Le Japon, le prix de la puissance*, Paris, Seuil, 1973.

(138) Augustin BERQUE.

土開発と社会変遷』や国家博士論文となった『稻と流水』などがある。¹³⁹⁾

この他、現代日本研究所では政治学のベルトラン・シュン¹⁴⁰⁾が講義している。特殊博士論文を提出して学位を得ている研究者としては、「日本人の食生活」を書いた民俗学のジャヌ・コビ¹⁴¹⁾、「日本の中小企業における雇用」を書いたイヴリィヌ・ルクレール¹⁴²⁾、また、金沢市の調査研究で学位を得たシルヴィ・ギャール・アニエス¹⁴³⁾がいる。

フランスの高等教育における日本学の教育研究機関。

I) 大学 Université。

1. Paris III (パリ第3大学), Institut National des Langues et Civilisations Orientales (元東洋語学校)
2. Paris VII (パリ第7大学), Langues et Civilisations d'Asie Orientale (東アジア文明教育研究単位)
3. Paris VI (パリ第6大学), Linguistique quantitative (数量言語学)
4. 上記の他, Lyon III (リオン第3大学), Bordeaux III (ボルドー第3大学), Provence, Aix-Marseille I (エクス・マルセーユ第1大学), Lille (リール大学)など。

II) Ecole Pratique des Hautes Etudes (高等研究院), IV^e Section (第4部門—歴史学, 文献学), V^e Section (第5部門—宗教学)。

III) Ecole des Hautes Etudes en Sciences So-

ciales (社会科学高等研究院), Institut des études japonaises contemporaines (現代日本研究所)。

IV) Collège de France (コレージュ・ド・フランス), Civilisation japonaise (日本文明講座)。

V) CNRS。(国立中央科学研究所)

結論

ギヨーム・ポステル以来の古い伝統をもつフランスの日本学は、19世紀中葉には日本研究の専門家を生み出し、以後、着実な発展を続け、パリは日本研究の重要な拠点となってきた。第2次世界大戦中は低迷したが、戦後、再び発展し、これまでにない活況を呈するようになった。こうした歴史と現状の中、フランスの日本研究には最近、二つの画期的な出来事が起った。第一は、1930年以来の歴史と伝統をもち、最高の学問的権威を誇るコレージュ・ド・フランスにおいて日本文明講座が創設されたことである。1980年2月、ベルナール・フランク教授は開講講演を行なった。フランク教授の研究は、いわゆるフランスにおける日本学の先駆けとも言うべきポステルの流れをくみ、文学、宗教に関する精緻なものであり、この領域におけるフランスの日本研究の学問的水準の高さを象徴していると言えるであろう。第二は、社会科学高等研究院における現代日本研究所の創設(1979年)である。これは第一の出来事とは顕著な違いがある。つまり、これまで人文科学の領域にとどまっていたフランスの日本

(139) *Le Japon, Gestion de l'espace et le changement social*, Paris, Flammarion, 1976.

(140) *Le rizière et la banquise*.

(141) Bertrand CHUNG.

(142) Jane COBBI, ((La vie alimentaire des Japonais, son évolution récente - étude centrée sur un village de montagne.))

(143) Yveline LECLER, L'emploi salarié dans les petites et moyennes entreprises japonaises.

(144) Mme Sylvie Guichard AGNÈS.

研究が社会科学の領域にまで及んできたことを示しているからである。この二つの画期的な出来事は、

フランスの日本研究が今や新たな発展段階を迎えるとしていることを示していると言えるであろう。